

拠点形成研究交流報告：農免疫ユースプログラム (Youth program for Food Safety and Functional Evaluation) の実施概要

研究拠点形成事業における実施項目として開催された、若手中心のユースプログラム「農免疫ユースプログラム (Youth program for Food Safety and Functional Evaluation)」が8月8日(火)-8月10日(木)の間に開催された。本セミナーの目的は、海外機関・国内機関において著名な研究者や先進的な研究を行っている若手研究者を招聘し、食品機能や分析・評価法などの研究について多面的な視点で情報交換・討議を行い、新たな研究拠点形成の可能性を模索することや、大学院生を対象に、外国人研究者と英語による討議を行う機会を与え国際的に活躍できる人材を育成することである。

本プログラムでは、講演者として Dr. Kenji Shimada (FMI, Switzerland.), Dr. Miki Igarashi (IMS, RIKEN, Japan), Dr. Ardiansyah (Universitas Bakrie, Indonesia), Dr. Tatsuyoshi Kono (Indiana University, USA) を国内外から招聘するとともに、本拠点形成事業より、Dr. Masaru Enomoto, Dr. Motoi Kikusato, Dr. Kiyotaka Nakagawa (CFAI, Tohoku University) が参画し、最先端の研究報告や議論を行った。研究拠点形成事業参加研究者の東北大学大学院農学研究科・農免疫センター (CFAI) 所属の教員 11 名と東北大学大学院の大学院生・ポスドク 42 名を含む計 60 名が参加した。

8 日のポスターセッションには発表者として大学院生・ポスドク 42 名、さらにポスター審査員・ディスカッションファシリテーターとして招聘研究者 14 名にもご参加いただき、闊達な討議が行われた。ポスターセッションにおいては、参加者は関連する領域別に 2 グループに分かれ、まず英語による 3 分間のショートプレゼンテーションを行い、その後、ポスターを前にしたセッションが行われた。ショートプレゼンテーションでは、3 分間という非常に限られた時間内での口頭発表ではあったものの、各発表者はエッセンスを詰め込んでおり、自身の研究をよりよく理解してもらうための工夫が見られた。続く、ポスターセッションでは、最初は緊張した空気が漂っていたものの、時間が経つとともに、緊張も解け、時折笑い声も聞こえてくるなど非常に和やかな雰囲気の中で、招聘講演者、参加者員の間で活発な議論



ポスターセッションの様子
(8/8, 東北大学青葉山新キャンパス 青葉山コモンズ)



Dr. W. van Eden
ポスタープレゼンテーションの様子
(8/8, 東北大学青葉山新キャンパス 青葉山コモンズ)



Dr. Nancy D. Turner
ポスタープレゼンテーションの様子
(8/8, 東北大学青葉山新キャンパス 青葉山コモンズ)

が行われた。関連分野別に2グループに分かれたものの、参加者は別グループのポスターにも足を運んでおり、異分野研究に関心が生まれたようであった。セッションを通じて、研究発表の審査が厳正に行われ、各グループで3名、計6名の優秀者が選出され、同日夜に開催された懇親会で表彰された。受賞者に共通していることは、研究内容のわかりやすさに加え、卓越した英語スピーチであった。これらの点については、今回受賞者できなかった参加者も共感しており、優れた研究発表能力の習得に向けた良い刺激となったようである。

翌9日午前に行われた片平キャンパス知の館での講演では、冒頭、Youth Program Organizerの東北大学大学院農学研究科仲川清隆教授により開会が宣言され、Dr. Shimada, Dr. Shintani及びDr. Enomotoが、それぞれ、DNA修復機構に関する研究、分泌性タンパク質に対する細胞応答に関する研究、及び生物活性天然有機化合物の合成に関する講演が行われた。

午後は、秋保温泉岩沼屋に移動して、15時から後半のプログラムが行われた。まず、前日の大学院生・ポスドクによるポスターセッションでのポスター賞受賞者6名による口頭発表が行われた。この発表は、昨日のプレゼンテーション時間より2分長い、5分間の発表であったにも関わらず、前日夜の受賞者発表から一晩で各自が内その後、Dr. IgarashiによるDHAの体内での役割と摂取に関する講演、Dr. Ardiansyahによる米ぬかに含まれる生理機能物質についての講演、Dr. Kikusatoによるポリフェノール類縁体の整理機能に関する講演、最後にDr. Konoによる膵臓β細胞に於けるカルシウムイオン恒常性に関する講演がなされた。食後のポスターを掲示した意見交換会では、夜遅くまで活発な議論がなされ、本シンポジウムで得られた新しいアイデアにより各参加者の研究が新たな方向へと進展していくと確信した。

以上のように本農免疫ユースプログラムの講演は、非常に多面的な内容で構成されており、参加者各自が普段取り組んでいる内容とは違った角度から「食の安全性と機能」に関する研究を俯瞰できたと言える。本農免疫ユースプログラムを通じて、新たな研究拠点形成や、国際的に活躍できる人材の育成に繋がることが期待される。

JSPS 拠点形成事業の研究交流支援に対して深く感謝したい。

文 喜久里基・榎本賢・仲川清隆

